

# ライフスキル教育を基盤とした保健科授業の検討

## —意志決定スキル及び問題解決スキルを実践例として—

学籍番号 229337  
氏名 渡慶次 蓮  
主指導教員 林 洋輔  
副指導教員 井上 功一

## 1. 背景・目的

### 1.1 保健科授業の課題

私が抱える保健科授業の課題として、生徒が保健の授業を自他及び社会の健康を保つために必要な学問として捉えることができていないことが挙げられる。それに加え、厚生労働省の調査によると、令和4年度の10～39歳の死亡原因の1位は自殺であり、その原因・動機は健康問題が最も大きな割合を占めることが明らかになっている。

### 1.2 実習校の課題

実習校の課題としては、自分事として捉えて授業に参加することができていないことが挙げられる。授業観察においてオフタスク(off-task)が目立った。また、実習校の教員から「意欲的な学習態度が見られない」「人間関係の問題から学校に来ることができない生徒もいる」などの声が上がっていた。さらに保健に関するWEB調査では、「保健の授業は好きですか嫌いですか?」という項目においておよそ半数が「興味が無い」と回答した。これらの課題は保健の授業を自分事として捉えることができないことが原因で生じた結果だと考えられる。

### 1.3 本研究の目的

私は上に述べた課題を踏まえ、生徒が保健の授業を自分事として捉え、日常生活に保健の知識を活用し生涯にわたって健康を保持増進できるようになるために「ライフスキル教育を基盤とする保健科授業」を提案する。ライフスキルとは、「日常生活で生じる様々な問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処する為に必要な心理社会的な能力」とWHOによって定義されており、スキル習得にはアクティブラーニング型の授業形態を取る。スキル習得の過程及びそのスキルの性質から上に述べた課題を解決できる可能性を秘めていると考えた。以上のことを踏まえ、本研究の目的は、「ライフスキル教育を基盤とする保健科授業を実施するとともに、その影響や有効性及び課題を検討すること」として設定した。

## 2. 研究方法

### 2.1 研究対象

大阪府立〇〇高等学校1学年1学級(計40名)を研究対象とした。

### 2.2 順序と評価方法

本研究は、全3時間(1コマ50分、計150分)で構成されている。1時間目にライフス

キルの概念的理解を目的にライフスキル教育を行った。2時間目には、実践研究前の健康・病気の原因帰属を測るために日本版 HLC（健康統制感）尺度の回答を調査し、3時間目にライフスキル教育を基盤とする保健科授業を実施した。

影響や有効性及び課題の検討には、日本版 HLC（健康統制感）尺度及びワークシートのルーブリック評価表を作成し用いた。日本版 HLC（健康統制感）尺度では、健康と病気への原因帰属を調査し、ワークシートのルーブリック評価表では「積極性」及び「自分事として捉えているか」を対象に調査を行った。

### 3. 結果及び考察

#### 3.1 日本版 HLC（健康統制感）尺度の結果及び考察

対象生徒は健康や病気の原因を自分自身の行動によるもの→家族や周囲の援助によるもの→医者や医学の発達によるもの→偶然や運命によるもの→超自然や報いによるものという順で帰属する傾向があることが分かった。この順序の結果は実践授業前後で変化はなかったが、要因またはその項目内によっては変化が見られた。その要因は専門職への原因帰属であり、他の要因と比較し明らかに平均点が上昇した。これは、ライフスキルを用いて問題を解決する過程で知識の内化と外化が行われる影響であると考えた。また、項目内に大きな変化が見られた要因は自分自身への原因帰属である。大きな平均点の上昇は見られなかったものの、健康や病気は自分の行動しだいで変えることができると考える生徒の割合が増加していることが分かった。このことから、ライフスキル教育を基盤とする保健科授業を行うことによって、健康になるために主体的に行動を選択する力を秘めていると考えた。

#### 3.2 ワークシート評価の結果及び考察

積極性があると評価した生徒はおよそ7割であり、残りの約3割は積極性が不足していると評価した。前年度実施したアンケート結果において保健の授業に興味がないと回答した生徒が半数を超えたことを踏まえると、ライフスキルを用いて社会問題を解決していく授業は興味関心が刺激されやすいと考えた。自分事として捉えていると評価した生徒はおよそ6.5割であり、捉えることができていないと評価した生徒は約3.5割であった。社会的な健康問題を自分事として捉えることを目的に設定した授業であったにも関わらず、約3.5割の生徒が自分事と捉えることができていなかったのは、保健科授業が受験的虚学として捉えられているからだという考察を行った。保健に関わる知識の内化と外化を伴う実践的な授業を展開するライフスキル教育を基盤とする保健科授業を行うことによって、生徒が虚学化された保健を実学と捉えなおし、生涯にわたる健康を保持増進する力を養うことができるのではないかと結論付けた。

### 4. 残された課題

残された課題として、今回の実践研究で平均点の上昇や相関関係について統計的な有意差を示すことができなかつたこと、時間の都合上、WHOによって定義されている10個のライフスキル全てを実践することができなかつたこと、日常生活に用いることによって効果を発揮するライフスキルをどのように評価するのか、また、ライフスキル教育と保健科教育の評価の関連性について明らかにすることなどが挙げられる。

これらの課題を解決するためには様々な観点から実践研究の蓄積が必要不可欠である。